

日本の絹文化 未来に



岡谷でフォーラム

伝統ある日本の絹文化の継承と発信を目指す「日本絹文化フォーラム2025」が18日、岡谷市のカノラホールなどで2日間の日程で始まった。「日本の絹文化を未来へ繋ぐ」をテーマに、初日は蚕糸絹の文化普及を図る大日本蚕糸会（東京）の松島浩道会頭（67）や専門家を招いて講演。蚕糸業の衰退に警鐘を鳴らし、存続に向けて課題を探つた。県内外の約130人が聴講した。（小山眞由美）

松島さん（大日本蚕糸会会頭）ら講演

製糸業で日本の近代化を支えた同市、同博物館、NPO法人シルク文化協会などでつくる実行委員会が主催。基調講演では、松島さんが「日本蚕糸業の現状と今後の課題」と題し、養蚕農家の高齢化に触れて危機感を示した。

養蚕農家の数や繭生産量の減少に歯止めがかからない状況とし、「5年、10年後に、日本から蚕糸業がなくなる可能性がある」と強調。国産生

蚕糸業存続へ課題探る

糸を守るために、高品質の繭を生産して製品化し、消費者に絹製品を適正な価格で購入してもらうなど、日本の蚕糸業を支える仕組みづくりが大切であると訴えた。

会場では、同市湊の日本画家花岡哲象さんが、絵を絹の布に描く「絹本日本画」8点を展示。絹本画の魅力や作品制作への思い、作家として歩んできた道のりについての講演もあった。

フォーラムは今年7回目。開会のあいさつで原田尹文実行委員長は、「絹の文化、伝統を絶やすわけにいかない。後世に残さなければ」と力を込めた。

きょう近代化産業遺産巡る見学会

19日は、製糸業の歴史を伝える「近代化産業遺産」を中心に、旧山一林組製糸事務所、丸山タンク、照光寺の蚕糸供養塔などを巡る見学会を行う。

大日本蚕糸会の松島浩道会頭が講演した日本絹文化フォーラム